京都橘大学女性歴史文化研究所　座談会

「女性歴史文化研究所　開設三〇年に向けて」

第一回「女性歴史文化研究所の黎明期～発展期にかけて」

第一部：女性歴史文化研究所誕生（イントロ・黎明期）

第二部：女性歴史文化研究所の研究活動および成果（発展・展開期）

日　時：二〇二〇年十一月二〇日（金）一三時～一五時

会　場：京都橘大学　第三応接室

出席者：※敬称略

田端　泰子（京都橘大学名誉教授／元学長／元女性歴史文化研究所所長（初代））

細川　涼一（京都橘大学名誉教授／元学長／元女性歴史文化研究所所長（第六代））

松浦　京子（京都橘大学文学部教授／元女性歴史文化研究所所長（第三・五代））

増渕　徹（京都橘大学文学部教授／女性歴史文化研究所所長（第九代））

北川　千差子（京都橘大学学術振興課）

コーディネーター・司会：増渕　徹

開催趣旨：

女性歴史文化研究所（一九九二年十二月開設）が三〇周年を迎えるにあたり、「なぜ女性史を主な研究テーマとする研究所を開設したのか」などの開設当時の学内外の状況や、研究プロジェクトの活動、シンポジウム、出版物などの研究成果を振り返り、女性歴史文化研究所の果たした役割や意義について、歴代所長で語り合う。

第一回目となる今回の座談会は、初代から現在までの所長四人を交えて、女性歴史文化研究所の黎明期から発展期（おもに一九九二年から二〇〇〇年まで）を振り返る。

また、第二回目として、「女性歴史文化研究所の成熟期～未来に向けて」をテーマに、開催する予定である（詳細未定）。

京都橘大学女性歴史文化研究所　座談会

「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

第一回「女性歴史文化研究所の黎明期～発展期にかけて」

【増渕】

きょうはお集まりいただきまして、ありがとうございます。この座談会の開催趣旨は表題にありますように、間近に迫った開設三〇年という時間を迎えて、女性歴史文化研究所をつくったときに、どんな目的があり、どんな方向性を模索しながらつくっていったのかを、あらためて考えていく必要があると思ったからです。当然、それは当時の課題意識を踏まえることにもなりますし、同時に、その後、さまざまなプロジェクトや出版物を通して行ってきた女歴研の研究を自分たちで評価し、最終的に次の段階に結びつけるためのヒントを得ることにつながるでしょう。そう思って、お集まりいただきました。

今回は、「女性歴史文化研究所の黎明期～発展期にかけて」というテーマのもと、主に開設前後から二〇〇〇年代に入るまでを振り返りたいと思います。

まずは草創期から関わってくださっている田端先生から女歴研の黎明期の話を、そして、それに引き続いてそれぞれの段階で行った研究の経緯などをお話ししていただきたいと思います。

それでは、田端先生、よろしくお願いいたします。

【田端】

この中では一番古くから女性歴史文化研究所に関わっている者として、私もこの機会に、当時のことを考えるにあたって、『学校法人京都橘女子学園100年史』、『伝えたい想い―枚方の女性史』、『日本女性史』全5巻などを見直してみました。それは、自分の記憶を確かめるいい機会でもあったと思います。

この話をするに先駆け、話の整理をするためにレジュメを作りましたが、その表題は「女性歴史文化研究所開設三〇年を目前に、思い出の数々と今後の前進を期して」としました。やはり見直してみるといろいろなことが浮かび上がってきて、歴史的背景や個々の出来事のつながりも見えてきたように思います。

まず女歴研開設に至るまでの前史ですが、学園の設立は一九〇二年で、初めは「京都女子手芸学校」という名前でスタートします。この

女学校は、その後、京都橘女子高等学校になり、学校法人京都橘学園と高校の出発点になりました。

そして、一九六七(昭和四十二)年四月に橘女子大学が開学しました。初代学長は高田三郎先生で、入学式や卒業式のときにいつも、教育理念として「高雅にして真実に」という言葉を述べておられたように思います。

これはラテン語から来た言葉だそうで、『100年史』を読み直しますと、その背景が少しくわしく書かれていて、〝真実を追求し、品性豊かで教養ある、精神的に「自立した女性」の育成〟を目標としているのだと語られています。この言葉は長いので、私たちは「自立した女性の育成」だけを覚えていた記憶がありますが、哲学者らしく、このような高い理想に燃えた女子大学として開学したことが、あらためて思い起こされます。

田端　泰子(たばた　やすこ)
京都橘大学名誉教授／元学長／元女性歴史文化研究所所長(初代)。
京都大学大学院文学研究科博士課程国史学専攻単位取得後退学。文学博士(京都大学)。
専門：日本中世史・女性史。
研究課題：「中世後期の村落構造に関する研究」「中世における女性の地位と役割」
主な業績：『日本中世女性史論』(塙書房、1994年)、『日本中世の社会と女性』(吉川弘文館、1998年)、『乳母の力―歴史を支えた女たち』(吉川弘文館、2005年)、『山内一豊と千代―戦国武士の家族像』(岩波書店、2005年)、『日本中世の村落・女性・社会』(吉川弘文館、2011年)など。

私は三年目から勤めましたが、脇田晴子先生(一九六七年四月に本学へ着任。一九八一～一九八四年三月まで本学歴史学科教授。女性史研究のパイオニアとして、その発展に貢献した)は開学のときから助教授としてお勤めになっていました。教授陣はものすごく有名な先生ばかりで、京大がそのまま引っ越してきたような方々で、特に歴史学科は非常に有名な先生ばかりで、すごく年齢の高い先生方と若々しい学生という二つのグループが存在する大学だったと記憶しています。

その中で注目したいのは脇田先生の回顧録にある発言です。それは脇田先生が就職される以前に、高田先生のお宅に訪ねていって、どういう理念を持った大学なのかということをお聞きになったとき、高田先生は「女子学生のみならず女性研究者の育成によって、その影響下に、学生の成長を図る。そういう大学をつくりたい」ということでした。

女子大ですから、女子学生はもちろん、女性研究者も育成することによって、その影響下にある学生も自立した女性になってほしい。そういう高い理念を持っておられることを聞いて、「この言葉にまいってしまった」と脇田先生もおっしゃっていましたし、私もこの高田学長の理念が、後に女歴研をつくる原点になったのではないかと思って

います。脇田先生は橘女子大学設置とその後の発展は「高田先生の初志が実現した」ものと、『100年史』で回顧し、喜んでおられます。

それからしばらく経って、大学の開学から一〇年を過ぎた一九七七年から七九年の三年間、大型の共同研究費として本学初めての科研費が交付されました。

テーマは「日本における婦人問題の総合的研究」でした。それまで婦人問題で「総合的研究」を謳った大きな科研費申請はなく、初めてそういうテーマで出したので当たったのだと思います。大学の方でも研究会の事務局を手伝ってくださって、研究費の執行を含め、いろいろと助けてもらいました。

この科研費の交付を機会に、学外でも研究団体として女性史総合研究会が発足しました。それからしばらくして、東京で総合女性史研究会もでき、学外団体の代表を脇田先生がお務めになりました。それまでにも研究会はありましたが、こんな大きな研究会ではなかったのです。脇田先生が代表を務めて、学内と学外の研究者・市民が結集して、もちろん「市民も聴きに来てくださってかまいません」という研究会でしたので、主婦や職員の方、市役所や府庁の方など、いろいろな方が聴きに来てくださいました。

この研究会では、各自研究をしながら、月一回の例会を持ちました。会員として女性史・日本史・日本文学・中国文学・ロシア文学・仏教学・社会学などの若手の研究者の方もたくさん参加していたので、そこに院生や学生、市民も加わり、非常に開かれた研究会をつくり、科研費で設定したさまざまな活動をすることになります。

この女性史総合研究会は、その後も現在に至るまで続いていて、年一冊、『女性史研究』を発刊しており、本学の院生も論文を載せてもらったりしています。

ただ、科研費をもらったので、その成果を挙げるのが一苦労でした。科研費の研究期間が終了してから少し後の一九八二年から『日本女性史』全5巻(女性史総合研究会編／東京大学出版会／一九八二年)を発刊しました。科研費の三大目標は、『日本女性史』を出版することと、『日本女性史研究文献目録』Ⅰ～Ⅳ(女性史総合研究会編／東京大学出版会／一九八三～二〇〇三年)をつくることと、女性研究者の実態調査を行うことでした。これらの成果を挙げるなかで、若手はすごく鍛えられたのではないかと思います。

そして、完成した『日本女性史』全5巻の半分の著者は男性であると、脇田先生が「あとがき」で書いておられます。これは女性史研究がまだほとんど進んでいなかった当時の状況をよく表していて、日本女性史研究の半分は男性研究者に担われており、いわば友軍のようなかたちで助けていただいて、脇田先生のお知り合いや同級生などに声をかけて、残る半分は女性研究者が担当して、ようやく出来上がったのでした。

『日本女性史研究文献目録』は男性の手を借りず、女性の若手だけで作りましたが、このような研究文献目録はそれまで一度も出版され

たことがなかったのです。一般の歴史学であれば、史学雑誌の年報などが毎年出るので、前年の論文や本だけ読めばいいのですが、それまで出たすべての文献を集めなければいけないので、ものすごく苦労しましたね。

そのときに役立ったのが本学の図書館で、女性史関連の雑誌も多いので、「ここが資料もいちばん集まっている。京大よりたくさんある」と言ってくれる方もいて、若手が大挙して本学の図書館に日参して目録を作成しました。夏休みなどは、大勢で週に二〜三回は来ていたと思います。自分が研究している時代だけでなく、女性に関係のありそうなものは古代から現代まですべて目を通して目録にしようということで、それぞれ担当を決めて、雑誌とにらめっこして作成した目録なので、えらく大変だったという思い出があります。

少し脱線しますが、私が担当していた部分で「元徳元年の中宮御懐妊」という論文がありました。南北朝時代の後醍醐天皇の中宮が懐妊されたというのは女性史に違いないと思って、中を読んでみたら、中宮の御懐妊はフェイクニュースで、それを表に掲げた後醍醐天皇方が鎌倉幕府を調伏（ちょうぶく）するための祈祷だったという内容でした。入れるべきかどうか、かなり議論しましたが、やはり懐妊の政治利用であり、当代の政治にも関係するから入れておこうということになりました。

このように、しんどいけれども楽しい思い出があって、静かにしなければならない図書館で「これはどうなん？」と大きな声で話をしていた覚えがあります(笑)。

とにかく、この三〜六年間は猛烈に忙しかった記憶があって、それしか頭に残っていませんが、本学の創立やそれ以前、あるいは、こうした学外研究者とのつながりの中で、学内外から研究所の設置を望む機運が高まったのではないかと、私自身は思っています。

その後、大学も充実して大きくなり、一九八八年には校名を「橘女子大学」から「京都橘女子大学」に変更しました。同年、日本私立大学連盟に正式に加盟し、カナダのオカナガン大学との交流覚書なども結ばれて英語英文学科学生の留学が始まるなど、大学も少しずつ大きくなってきたなと実感した時代でした。

そして、一九九二(平成四)年十二月に女性歴史文化研究所開設記念シンポジウムが開催され、ここから研究所がスタートします。そのシンポジウムの特徴は、学内の研究者はもちろんのこと、学外の研究者、さらにアメリカやヨーロッパの研究者にも発信できる研究所として開設されているので、海外の研究者も開設記念シンポジウムに参加してくれることになりました。この時の講演記録は女性歴史文化研究所紀要創刊号に掲載されています。

このとき脇田先生は、すでに本学から鳴門教育大学に移っておられましたが、シンポジウムに参加してくださって、「とても立派な研究所ができた」とお褒めをいただきました。

同年の四月に『洛東探訪』(京都橘女子大学編／淡交社／一九九二年)が発刊されます。これは本学で行った地域連携の最初の成果ではないかと思います。

写真１　『女の歴史』Ⅰ～Ⅴ（ジョルジュ・デュビィ、ミシェル・ペロー監修／杉村和子・志賀亮一監訳／藤原書店／1994年～2001年）

Ⅰ．古代　Ⅱ．中世　Ⅲ．16～18世紀　Ⅳ．19世紀　Ⅴ．20世紀の全５巻、各２巻で構成。

一九九四年にはＧ・デュビィ、Ｍ・ペローさんが監修された『女の歴史』（写真１）の日本語版が、本学の杉村和子先生（一九九四年三月まで本学歴史学科教授）や志賀亮一先生（本学一般教養課程を経て、当時は英語英文学科教授）の翻訳で出版されました。この頃は日本史の方も世界史の方も、それから志賀先生や鎌田明子先生（本学一般教養課程を経て、当時は英語英文学科教授）のように一般教養を担当されていた方や、通訳をされていた英語英文学科の西村和美先生（当時は本学英語英文学科助教授）など、大学の皆が協力して、研究所を盛り立ててくださったのです。研究所の運営委員会は全学規模でやっていて、人数は少なかったのですが、とてもにぎやかな雰囲気があったので、それも楽しい思い出だったと思います。

続いて、一九九四年に大学院文学研究科歴史学専攻（修士課程）が設置され、一九九九年には博士後期課程が設置されました。

これらのことがすべて、女性歴史文化研究所の血になり、肉になるんですね。いろいろな分野から専門的知見を持って研究所を見守ってくれる人が学内に多数おられる。そのことがすごくありがたかったと思います。

一九九五年に第四回世界女性会議が北京で開かれて、そのＮＧＯフォーラムに女性歴史文化研究所から参加しようということになり、ちょうど本学の留学生第一号の中国人学生がいたので、いろいろ中国のことを聞くなど、研究所も、周りの人の支援を受けながら活発に動ける時代になってきました。

もう一つお話ししなければいけないのは、枚方市からの受託研究として一九九七年に出版した『枚方の女性史』（写真２）です。

これは三年くらいかけて、地域連携として活動した苦労の挙句に実を結んだ、とても大切な書物だと思っています。構成は女性史の通史、年表、聞き取りからなり、研究所をあげて作成にあたりました。

特に大変だったのは、女性史の通史編で、近現代のみでまとめることとしたので、中世史しか研究したことのない私は、このとき初めて近現代の論文を読んだり、当時研究所の嘱託研究員だった岩堀容子さん作成の関西全域を見渡した年表づくりを手伝ったりして、近現代史の知識が増えた時代でした。

聞き取りについては、学内の教職員が多くの時間を割いて参加してくれました。教職員には聞き取りグループの指導をしてもらい、聞き取りにも行ってもらい、聞き書きとしてまとめられた文章も点検してもらって、たいへん忙しい思いをさせました。ありがとうございました。

この聞き取り部分は、公募に応じてくれた枚方の女性たちを班に分け、本学の教職員、院生、研究生が録音機を片手に、その女性たちと一緒に地域を回って、調査を行いました。その後、テープ起こしをして、事実を確かめ、文章の校正を行いました。最初の作業は聞き取りのワーキングメンバーが行いましたが、最終的にその内容が本当に事実かどうか、新聞にはどう書かれているかなどといったことを調べるのは研究所で行ったので、院生や事務局は、すごく大変だったと思います。ですから、人海戦術でやっと完成したという印象が強いですね。

現代史は資料の多さが特徴で、それに加えて枚方では聞き取りをやっていますから、生の声を聴くことができてうれしかったのですが、まとめるのは大変で、過酷な状況に圧倒されました。その中で枚方の女性が果たした役割の重要さを浮き彫りにできたことは、大きな収穫であったと思います。

枚方は、女性会や婦人会の活動が盛んな地域でした。それは戦前から続いていて、農繁期の保育所を女性の手で運営したり、戦後は夫や息子を戦争で失い母子だけになった家庭に対してバザーなどを通じて救援活動をしたり、いろいろなことを積極的にやってきた地域なのです。それ以後も保育所運動などに積極的に取り組んで、さらに障害者運動にも力を入れていた地域なので、私たちにとっても非常に勉強になる、いい素材を持っている地域を研究できたと思います。周辺の市からは、枚方は女性(婦人)運動の手本と仰がれていることも、のちに判明しました。

写真２　『伝えたい想い―枚方の女性史』（枚方市発行／京都橘女子大学女性歴史文化研究所編／ドメス出版／1997年）

枚方市、公募で集まった枚方市在住のワーキンググループ、女性歴史文化研究所の三者の共同作業で作成した。本学初の受託研究として取り組まれ、第一部「通史編」、第二部「聞き書き編」、第三部「年表」で構成。

それからまた大変だったのは、『伝えたい想い―枚方の女性史』の校正のときで、最後に出版社がある東京で出張校正があったのですが、専門の校正者がいて、特に聞き取り部分について「こういうことを言っているが、これは事実か、この点で疑問がある」と言われるのです。そのたびに京都に待機している人に調べてもらいましたが、全部で一〇〇箇所以上ありました。

【北川】

田端先生と佐藤令子先生(当時、本学歴史学科教授)と私の三人で現地に行って最終校正を行い、女性歴史文化研究所に残ってもらった細川先生に電話をかけて調べてもらいました。最終校正だから、もうほとんど終わりだと思っていたのに、ものすごい量の校正が入って大変でした。

【田端】

資料をたくさん持っていったので、そこでも調べましたが、それでもわからないところがあって、ものすごく厳密な校正に圧倒され、これこそが近現代女性史を出版する「老舗」出版社なのだな、といたく感心しました。

【北川】

『枚方の女性史』は、枚方市の女性たちを公募で集めたのですが、積極的に関わりたいと思っている人たちがいる一方、仕事を持っている人や子育て中の人の中には、「なかなか、そんなふうに時間を使えない」という二つの層がいて、どうコントロールしたらうまくいくのだろうかと、最初はすごく悩んだ記憶があります。時間のかけ方が人によっていろいろ違ったので、実際に聞き取りに動くまではかなり労力が必要でした。

でも、いざ動き始めたら、いろいろな人の昔の話が聴けるというおもしろさもあり、ワーキングメンバー全員が積極的に動いてくれました。

一年目は主として枚方の歴史や近代女性史などに関するレクチャーをやって、二年目に実際に聞き取り調査を実施することにしましたが、だんだん「こういうことをやったらいいんだな」と理解してもらったのだと思います。

田端先生たちに、ワーキングメンバーから提出された原稿を見てもらい、文章を整えましたが、聞き取り対象者の話すことが一〇〇パーセント正しいかどうかもわからないので、その確認作業に思ったより時間がかかり、大変でした。

聞き取り対象者の選定は市役所の仕事なので、「こういう分野もあったほうがいいのではないか」と思っても、そういう方がリストアップされるかどうかわからなくて、その辺はジレンマがありました。

ただ、学生も院生も聞き取り調査に一緒に行って、文章をつくったり、いろいろな意見を出しあったりしたことによって、彼女たちの成長にもつながったと思います。

【田端】

いま言われたように、その頃の院生の中には、大学院修了後に自治体史編纂の方の仕事に進むなど、この経験が活きている人もだいぶありますから、いろいろな経験を若いときにしておくのはいいことなのだなと思いますね。

『枚方の女性史』にしても、科研費にしても、受託研究や図書出版には学内教職員や院生らの大きな支援・協力があったことを特記しておきたいと思います。一丸となって取り組むと、やった人だけでなく、その周りの人たちにも影響が及び、その後の経験としても蓄積されていくということが見えてきました。

いま振り返ると、私の所長時代はやはり発展期だったと思います。毎年シンポジウムを開催して、それだけでも大変なのに、研究紀要にもきちんと論文が載せられています。いま読み返してみても、回を重ねるごとに非常におもしろい論文が増えているし、学内全体の協力が

あったので、私としては非常にいい時代に女性歴史文化研究所に携わらせていただけたなと思っています。

【北川】

研究所を立ち上げた当時、本学は英語英文・国文・歴史の三学科でした。その中で、他にも選択肢はあったはずですが、なぜ女性歴史文化研究所を立ち上げたのでしょうか。当時、どういう議論があったのかを教えていただければと思います。

松浦　京子（まつうら　きょうこ）
京都橘大学文学部歴史学科教授。元女性歴史文化研究所所長（第三・五代）。
大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士課程単位取得満期退学。文学修士（大阪大学）。
専門：イギリス近代史。
研究課題：「イギリスにおける福祉国家と労働者女性運動」「イギリス女性生活史」
主な業績：『経済と消費社会〈ジェンダー史叢書６〉』（共著）（明石書店、2009年）、『異文化交流史の再検討―日本近代の〈経験〉とその周辺―』（共著）（平凡社、2011年）、『身体はだれのものか―比較史でみる装いとケア』（共著）（昭和堂、2018年）など。

【田端】

そのころは、まだまだ小さな所帯で全体の風通しがよかったのと、女性教員も多かったこと、また、当時は女子大学だったので、女性の地位向上に貢献するような、研究機関でありながら社会的要請にも応えられるような研究所をつくらないといけないだろうと、そのときの教授会の構成員全員が賛成してくれたからだろうと思います。

【松浦】

そうですね。きょうの先生のお話にもありましたように、七七年からの科研費での「婦人問題の総合的研究（当時は「女性」ではなく「婦人」だったのですね）」でたくさんの研究者が集まり、かつ目録をつくるというのが大きかったのですね。先ほど、「図書館にいろいろな文献が集まっているから」というお話を伺って、「これがあったから女歴研につながったのだな」と思いました。

【田端】

どこにもない目録ですので、歴史学界すべてを見直さなければならず、本当は集めたらもっといっぱいあったのですが、ある程度絞らないといけないということで絞りました。その後、目録は三冊までできたのですが、いまや目録は紙の時代ではないということで、四冊目からは冊子とともにデジタルで出るようになっています。東大出版会も、女性史関係の雑誌は東大にもないから、最終的な検索をするのが大変なんです。

【松浦】

つくるのは大変ですが、後に続く学生や研究者にとって、目録はとても大切です。

【田端】

だから、いまも「先行研究を検討するときは『女性史研究文献目録』に載っている論文くらいは読んでから始めなさい」と言うことができます(笑)。

【松浦】

そのときにたくさん集まった資料や文献が、やっぱり女歴研の強みなのだなと思いました。

【田端】

そうですね。東京にはあったでしょうが、関西の他の大学にはないものがうちの大学にはありましたから。

言い忘れましたが、当時、このような女性関係の研究所はお茶の水女子大学と昭和女子大学、東京女子大学など、いくつかしかなかったから、本学に集まってもらって連絡会議をつくろうかという話もありましたね。

【北川】

一九九八年に、お茶の水女子大学、昭和女子大学、東京女子大学、愛知淑徳大学など八大学の女性学やジェンダー関連研究所・センターの関係者に本学に集まっていただいて、「女性史・女性学研究所交流会」を開催して、それぞれの課題や取り組みについて話し合ったことがあります。

当時、東京ではけっこう交流を行っていたようですが、関西では集まる機会が全然なく、そのとき初めて東西の女性学・ジェンダー・女性史関連の研究所が一堂に会して交流することができました。

いまならネットを使って、他の大学が何をやっているかなどを簡単に調べることができますが、当時は現地に行って、見たり聞いたりしないとわかりませんでした。交流会で情報交換をすることで、共通の課題を確認し、今後の展開を検討することができました。

また、ちょうどホームページが作られ始めた頃だったので、他大学のホームページを見ることによって刺激を得て、リレーエッセイを掲載したり、リンク集を作成したり、積極的に情報発信にも取り組みました。

【細川】

黎明期ということで言えば、私が本学に着任したのが一九八九年ですので、女性歴史文化研究所の開設は私が来た後のことですが、女性歴史文化研究所初代所長であると同時に女性史の研究者としての田端先生にお聞きしたいことがあります。

科研費が交付された中での『日本女性史』は、日本史における女性史の確立ということで、本学に限らず全国レベルで見ても、研究史的

に大きな意味を持っていると思います。脇田先生が中心になられたことはわかるのですが、田端先生は、最初は山科を中心とする村落史を研究されており、その後、女性史研究にシフトを大きく移してこられました。

せっかくですから、その辺りの、田端先生ご自身の研究者としての研究対象の変化や思いも語っていただければという気がします。

また、『枚方の女性史』の協力者でもある、当時本学院生だった大利直美さんや、『日本女性史』に原稿を書かれた本学の第一期卒業生の加藤美恵子さんなどがいます。本学の卒業生で、大学の職を得られたかどうかは別として女性史の研究者としての道を歩まれた方もおられるわけですので、田端先生が女性史研究者として道を歩まれる中での黎明期からのお話をお願いしたい。一つには、やはり脇田晴子さんという方の存在が大きかったことは間違いないと思いますが。

細川　涼一（ほそかわ　りょういち）
京都橘大学名誉教授／元学長／元女性歴史文化研究所所長（第六代）。
中央大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得後退学。博士（文学）（大阪大学）。
専門：日本中世史・思想史・日本文化史。
研究課題：「日本中世の社会と寺社」「日本中世の女性と仏教・芸能」
主な業績：『漂泊の日本中世』（ちくま学芸文庫、2002年）、『関東往還記』（平凡社東洋文庫、2011年）、『日本中世の社会と寺社』（思文閣出版、2013年）、『感身学正記』1・2（平凡社東洋文庫、1999・2020年）など。

【田端】

私が大学に入学したのは六〇年安保の年でした。卒論を書く頃から、中世の山城国久世荘を研究しようと思って、なぜか村落の歴史（女性は家長になれないので、女性の名前はほとんど出てきませんが）をやらなければいけないと思って、革島家文書と東寺文書を読んで、大学を卒業したわけです。

だから、畿内の村落研究が研究の出発点だったのですが、それをたまたま『日本史研究』に載せてもらったので、周りの男性研究者たちから「卒論が載るのはめずしいね」と嫌味を言われたこともありました。

大学院の二年を終えたところで、橘女子大学から「まだ学生が少ないので、すぐでなくてもかまいません。修了されたら本学に来ませんか」と就職のお話をいただきました。小葉田淳（こばたあつし）先生（京都大学名誉教授）や赤松俊秀先生（京都大学名誉教授）にお話しすると、「そんなに早くから言ってくれるところはない。ぜひ行きなさい」と。もちろん、小葉田先生も大学の設立に関わっておられたのですが、そう言われて、「そんなものか」と思い、院を修了したら行くことが決まりました。

そうすると、また周りの男性たちから「大学院にいる間から指定席が決まっているのはめずしいな」などと嫌味を言われた覚えがあります(笑)。でも、嫌味を言われながらも、大学院でいろいろ話を聴いて議論したことが、その後の研究生活には大いに役立っていると思います。

大学院を終えて、こちらの大学に来たら、いきなり特講を持たされて、戦国大名論などを二回ぐらいでやるのですが、それまで大学院でやってきたような難しいことを話しても、学生たちはけっこう聴いてくれたのです。

でも、しばらくすると、「それだけではあかんなあ」と思い始めました。戦国大名の研究が進んでいる領国では男の人しか出てこないし、戦国大名の奥さんも研究対象になるのはだいぶ先のことでした。今川家の寿桂尼のような人が息子に代わって政権を握っていたというようなこともわかるようになったのは後だから、研究上に出てくるのは男性ばかりなのです。

それで、科研費が当たって、『日本女性史』の戦国時代を書いてほしいと言われたときに、ハタと困りました。女性史としてどうやって戦国時代の論文を書いたらいいだろうと考えて、戦国大名家法における女性関連条項を抜き出して調べてみると、けっこうあることがわかりました。そこには何が規定されていたのか、各階層の女性に関して大名が何を問題にしていたのかということを書いたら、褒めてくださる批評が出ました。それで、「これは女性史として、また女子大学で研究していく方向が見つかった」と思って、それ以後は村落・領主制研究と女性史研究の二本立てでやっていこう、二頭立ての馬車で進もうという決心がついたのです。

【細川】

村落史から入られたということで言えば、『日本女性史』のときには、脇田先生は都市、田端先生は農村・村落ということで、脇田先生からは「分業みたいなもの」という話を聞いたことがあります。脇田先生との相互の研究ということで言えば、田端先生はそういう意識はおありだったのですか。

【田端】

それは意識していましたが、都市と農村だけでなく、大名の研究も他の封建領主の研究も非農業民の研究もしないと全体像はわからないと思って、自分の知識を深めるために中世後期社会全体の中での女性(武家の女性も、公家の女性も、村落の女性も)の地位を見ようかなと思ったんですね。そうすることで、自分もだんだんと成長していくことができたと思います。

高田先生が言われたように、大学で学生と一緒に研究することによって、若手研究者も揉まれて、成長できるのだとわかってきました。

加藤美恵子さんは、歴史学科の第一回の卒業生で、脇田先生に付いて勉強したのですが、お連れ合いが経済学の方だったので、研究者になる道はあきらめて、その後、島本町の町議になりました。

【松浦】

私の場合は西洋史ですが、西洋史における女性史学、歴史学としての女性の研究となると、ヨーロッパでも真の意味で開始されたのは六〇年代の終わりで、学問ジャンルとして女性史学が確立したのは七〇年代と言われています。その機運の流れもあって、七七年、「日本における婦人問題の総合的研究」に高額の科研費が当たったのかなと思います。

ただし、科研があたったから、田端先生がそうであるように、初めて女性史的なテーマに手を出すという感じだったんでしょうね。

【田端】

そうそう、そうです。そういう意味でも、脇田先生が先頭を切って大型科研を取ってくれたことは、画期的な出来事だったのです。

【松浦】

それで、どこかに書かれていないかと資料を探したとおっしゃっていましたが、西洋でも同じようなものです。西洋でも、まだ女性史について書かれていない。女性史について何もわかっていない。だから、まずは発見する。歴史の中で欠けている部分、格好よく言えば「歴史研究の空白」を埋めるためにという感じで始まっています。大名研究でも、男の大名のことはわかっているけれども、その大名領国内の女性のことは誰も知らなかった。それに田端先生が手を出された。そんな感じなのですね。

【田端】

そうですね。「大名領国規範と村落女房座」を書いたのですが、大名領国規範の中に女性関係条項はある程度ありますが、村落の女房座は一つしかないので、そのほかの一般の女性の姿を引き出そうとしてもなかなか難しかった。村落女房座は近江の菅浦にあったのですが、そういう時代ですから、まず史料から発掘して、それから論を組み立てなければいけないという、そのころは女性史研究の本当に初期の段階だったのですね。

【松浦】

言葉は悪いですが、まさに「手を出して」みたけれど、はたして何ができるのだろうという感じから始まったのですね。

いまの学生にとって女性史学は、当たり前のように存在する学問分野なので、先生が感じられたような困難性はあまりわかっていないですね。

【細川】

史料の問題もそうですし、脇田先生、田端先生、東京では中世で言えば歴史学者の黒田弘子さんなど、第一世代と言うと失礼かもしれませんが、当時の女性史研究者は、村落史研究なり商業史研究なり他の分野で研究者として学界に認めさせて、女性史研究をアカデミズム的に見てもきちんとしたものというかたちで確立していった。

先ほど松浦先生から西洋史の話がありましたが、日本史のほうは八

増渕　徹（ますぶち　とおる）
京都橘大学文学部歴史学科教授。女性歴史文化研究所所長（第九代）。
東京大学文学部第二類（史学）卒業。文学学士（東京大学）。
専門：日本古代史・文化財保護行政史。
研究課題：「出土文字資料に関する研究」「平安時代史研究」
主な業績：『史跡で読む日本の歴史５　平安の都市と文化』（共著）（吉川弘文館、2010年）、『京の鴨川と橋』（共著）（思文閣出版、2001年）、『京都の女性史』（共著）（思文閣出版、2002年）、『日本の時代史30　歴史と素材』（共著）（吉川弘文館、2010年）、『医療の社会史―生・老・病・死』（共著）（思文閣出版、2013年）など。

【田端】
私などは、日本でもこれだけ史料がなくて探すのに苦労するのに、外国をフィールドとされる松浦先生はすごいなと（笑）。

【松浦】
七〇年代の終わりに卒論のテーマを決めたときに、イギリス女性史の河村貞枝先生（京都府立大学名誉教授）が京大の史学科西洋史専攻の助手を務めていらして、そのご縁で、私のメンターにあたる方となりましたが、河村先生が一九世紀イギリスのミドルクラス女性によって展開されたフェミニズムをテーマにした研究をなさっていて、「じゃ、あなたは私のやっていないところをやってね」ということで、労働者階級の女性の労働運動史に入ったという感じですが、史料は全然なかったです。つまり、普通に書かれている労働運動史研究の中に少しでも女性について言及している部分があったら、それをひたすら拾い上げていくという感じでした。
おそらく日本でも、八〇年代に女性史学が花開いていくと、なんとなく「女性史をやっています」と言えるようになったのかもしれませんが、西洋史の分野では、八〇年代前半は「そんなものは歴史学になるのか」と言われていました。

【増渕】
『日本女性史』は、かなり評判になりましたが、研究に携わった方々からすれば誤解とも思えるような反応などはありませんでしたか。
〇年代頃からで、初めから「女性史の研究者です」では通用するのが難しかったというか、やはり他の分野で研究者となった後、女性史をやるという順番しかなかったのかなという気がします。

【松浦】
パイオニア世代はそうだったと思います。

【田端】

名が残っている女性については、昔から研究があって、目録をつくったからよくわかるのですが、大先生もいろいろ言っておられるのです。今参局（いままいりのつぼね）や日野富子など、悪女という通説に対してそれなりの史料を出して言っておられるから、方法はそれほど変わらないのですが、それはほとんど嫉妬深いなど個人的資質に解消されて、「その人の個人的資質がこうだったから今参局と日野富子は対立したのだ」ということに帰せられているので、「そうだろうか」という疑問はありました。

それを解決する出口が見えてきたのは、やはり『日本女性史』などが出て、それ以後、古代の女帝研究などもすごく進みました。男性も研究しておられますし、それで正当な議論の俎上に上り始めた。女性史研究と一般史の研究の間で相互に議論できる俎上に上り始めたことも、歴史学界の中で果たした大きな役割の一つではないかと思っています。女帝研究などの古代の女性史研究者たちも、これでずいぶん元気になりましたので（笑）。

話が逸れますが、研究所ができてから、最初のシンポジウムに外国の方も呼ばれて、国際学会的なこともできるようになったので、その後、脇田先生の在職中に、研究所の行事ではないのですが、外国の方をいろいろ呼んで日本女性史の研究会をやったことがあります。

そこで十五～十六人が十五分ずつくらいの報告を順に回したときに、古代の研究発表をされた外国の方が天照大御神のことを英語で「テンショウ」と言っておられるのです。周りにいる日本人や日本語のわかる人が教えなかったからだと思いますが、それを聴いていて「これは天照大神のことではないかしら」と思って、「違いますよ」とメモを渡そうかと思ったけれど、英語で何と書けばいいのかわからなくて（笑）。西村先生が通訳をしてくださっていたのですが、西村先生も「何のことだろう？」と。その人はアメリカ人だから、〝テンショウ〟〝she〟〝her〟などと言っておられました。

そういうこともあって、学内自体も、女性歴史文化研究所ができたことによって非常に活性化したなあと思いましたね。

【北川】

これは開設当時のポスター（写真3）ですが、問題になりましたね。「女性歴史文化研究所なのに、なぜ女性が裸になっているんだろう？」と。このとき、研究所に集う学内の教職員は「ヒストリー（he's story）ではなくてハーストーリー（her story）だから、こういう見方も必要だ」と受け止めていましたね。

また、シンポジウムのテーマが「性と生殖」（第四回シンポジウム「〝性と生殖〟（リプロダクティブ・ヘルス&ライツ）を考える―北京世界女性会議からの問題提起」）のとき、「生殖はいいけど、なんで性なのか？」と当時の事務局長に言われました。その話をしたら、鎌田先生が「性がなければ生殖はないのに、なんでそれがいけないんだ」と、すごく怒っておられたのを覚えています。

写真３　女性歴史文化研究所開設記念シンポジウムポスター

1992年12月、「女性史の新時代をめざして―女性史研究の現状と課題」をテーマに、マーティン・コルカット（プリンストン大学教授・アメリカ）、パトリシア・ツルミ（ヴィクトリア大学教授・カナダ）、脇田晴子（大阪外国語大学教授）が講演を行い、初代所長の田端泰子（本学歴史学科教授）、杉村和子（本学歴史学科教授）がコーディネーターとしてパネルディスカッションに参加して開催された。

【細川】

第一プロジェクトから関わっている者として、発足時のことを少し…。田端先生がおっしゃったことに、補足的にお話しさせていただきますと、今回の座談会のプログラムには、「第二部：女性歴史文化研究所の研究活動および成果（発展・展開期）とあり、プロジェクト一覧（表１　25ページ参照）が掲載されていますが、このうちの第一から第四までは女性歴史文化研究所ができるとともに発足したプロジェクトです。先ほど田端先生が言われた「全学的に」というのも、ある意味で言えば、女性歴史文化研究所で本学の歴史学科の教員のほぼ全員で取り組もうというのが、第一プロジェクト「歴史における家族と女性―日本と世界」でした。

第二プロジェクト「現代社会と女性」は、どちらかといえば女性学的なことをやっていこう、本を出すことを目的とするよりはシンポジウムや研究会でやっていこうということで、鎌田先生を中心に女性学的な要素の強いプロジェクトとして発足しました。

そして、志賀先生と杉村先生によるペローさんの女性史の翻訳が第三プロジェクト「西欧女性史研究―フランスを中心に」です。

第四プロジェクト「Ｄ・Ｈ・ロレンスの愛と性」は、英語英文学科の教員にロレンスの研究者が多かったので、それをそのままプロジェクトに入れました。

第一プロジェクトが歴史学科を中心に日本語日本文学科も加わって、第四プロジェクトは英語英文学科というかたちで、全学的に四つのプロジェクトがスタートしたという記憶があります。

発足してすぐに枚方市からの受託研究があり、これが第五プロジェクト「地域女性史研究　大阪府枚方市の場合」として始まったので、いわば一から五までのプロジェクトが発展期に並行していったというかたちだと思います。

【北川】

第五プロジェクトは受託研究で、一九九四年に三年計画で始まり、一九九七年三月に『伝えたい想い―枚方の女性史』が発刊されました。

【細川】

『枚方の女性史』ができたときにはもう大阪大学に移られていたと思いますが、村田路人先生（当時、本学歴史学科助教授）にもけっこうやってもらったんですね。

【田端】

そのころ、奈良県の女性史、静岡の女性史とか、県単位の女性史はけっこう出ていたけれども、市単位の女性史はめずらしかったから、こちらもすごく張り切って、「枚方も調べていくとだんだんいいところだなあ」と思うようになりました。

読み直してみると、あの聞き取り部分では、多くの方がすごくいろんなことをしゃべってくれています。枚方には戦前、火薬庫があって、そこに非常勤で勤めていた女の人は、爆発があって、たくさんの人が亡くなったりしたとか、当時の給料がいくらだったかを何円何銭の単位まで覚えていたりするのです。

いろいろなところに資料になるものがあったので、結果的にいうとすごい聞き取りをしたのだなあと、我ながらよくやったとほめてあげたいくらいです。それで授業でも時々『枚方の女性史』の聞き取り部分を紹介しています。

【細川】

戦前はそうですし、戦後の団地も枚方が一番早いんですね（香里団地）。

【松浦】

大原社会問題研究所や大原美術館は、倉敷紡績の創業者一族の大原家が設立していて、たしか枚方にもクラボウがありましたね。そういう社会貢献などに強い関心を持つ経営者がいたからこそ、枚方にあった工場内に従業員教育のための学校をつくったり、工員の子どもたちのための学校をつくったり、社会問題に対して真摯に取り組んできたと聴いたことがあります。めずらしい日本の企業です。

だから、枚方においても、そういう企業があったがゆえに、そこに関わった人たちが女性の組織や運動につながっているのではないかと、きょう田端先生のお話を聴いて思いました。

【田端】

そうですね。枚方でそういう地域の活動があって、本もできたということで、周りの市が刺激を受けて「つくりたい」と言われるけれども、うちは枚方で精いっぱい（笑）。

【北川】

あのときは枚方市に女性政策課ができて、その課長と担当者が「ぜひ枚方女性史で聞き書きをやりたい」と、すごく熱く語っていて、聞き取り調査の候補者選定や依頼、ワーキンググループの対応など、いろいろ助けられました。

【松浦】
枚方市は、大阪府内の市町村としては広くて、いろいろな地域性が集まっているところのようですね。

【田端】
昔ながらの土地と、団地が建った新しい地域とがあります。

【増渕】
京都にも大阪にも近いし、まだ宿場の名残が残っています。
淀川を抑えるために樟葉に台場が造られたり、奈良にもつながっているので、枚方は、いろんなところからいろんな人たちが入り込む場所。それだけに、まちとしての性格は複雑だったのではないでしょうか。

【北川】
昔からいる層と、新興住宅地ができて後から入ってきた層とでは、かなり違う感じがしました。

【松浦】
昔から、農村地帯だけでなく、宿や遊女屋があったところは、やはり違うと思います。

【細川】
そういう施設があり、くらわんか船もあったということで言えば、枚方は、陸の東海道五十七次でもあるけれども、淀川が大坂と京の間の大動脈で、その中間地点という性格もある。
第一から第五プロジェクトまでが黎明期と発展期で田端所長の時代だとすれば、第六プロジェクト(一九九八～二〇〇二年度)以降は小野和子先生(当時、本学歴史学科教授)が所長になった二〇〇〇年前後に移ってからだと思います。
第一プロジェクトが終わったから、歴史の分野で次はどうしようかということで、第六プロジェクト「京都の歴史と女性」を日本史の教員を中心に発足させました。
女性歴史文化研究所の黎明期・発展期以後というのは、一方で大学全体の変化も頭に入れなければいけないことになってきて、先ほど田端先生が黎明期・発展期のところで「全学的に」とおっしゃったのも、文学部単科で、教員の人数も少なく、職員の方の人数も多くない中で、女性歴史文化研究所を大学全体で盛り立てようとすることに対する理解があった時代だと思います。
ところが、第六プロジェクトが活動している二〇〇〇年代になると、文化政策学部ができて複数学部体制になり、二〇〇五年には共学化するという変化がありました。
そして、共学化と同時に、田端学長のもとで看護学部をつくろうということになり、学部が複数展開していく中で、文学部単科の中での「全学的な女性歴史文化研究所」という位置付けから、文化政策学部

は文化政策研究センター、看護学部は看護実践異文化国際研究センターという中で、「全学的に」と言いつつも、どちらかといえば文学部を中心にということで、大学全体の中での女性歴史文化研究所の立ち位置は「大学の一部」的要素が強くなってくる。それが第六プロジェクト以降の時期かと思います。

と同時に、複数学部ができ、医療・看護系などは科研費もわりあい取ってくる中で、外部資金の導入も言われるようになりました。研究所の予算のすべてを大学が付けるのではなく、「科研費などの外部資金を女性歴史文化研究所でも取るべく努力してください」というような中で、「女性歴史文化研究所が生き残るためにはどうしたらいいのか」という課題が出てくるのが、松浦所長や私が所長だった時期だと思います。

そのように第五プロジェクトまでと第六プロジェクト以降で大きく線が引かれると思います。田端先生が話してくださった黎明期・発展期は第五プロジェクトぐらいまでの話であって。

【増渕】

そうでしょうね。第六プロジェクト以降は、女歴研のプロジェクトの性格や位置付けが変わった。

【細川】

だから、先ほど増渕所長が言われたことで言えば、学生なども参加してもらって学内で学術講演会をやるという要素よりは、市民の方たちにいかに本学をアピールするのか、その一つに「本学は女性史研究をこれだけやっています」というかたちで、市民の方たちにアピールするということで大学コンソーシアム京都にも出ていく。その意味で言えば、講演会の位置付けも多少変わってきたということだと思います。

【北川】

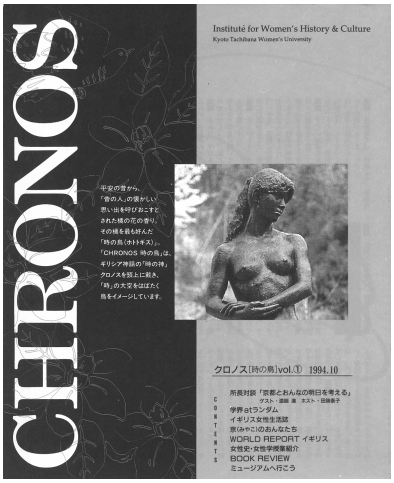
第二プロジェクト「現代社会と女性」が活動していたのは、鎌田先生と河原和枝先生(当時、本学現代マネジメント学科教授)がいた時代まで、それ以降、社会学系の先生がいなくなったこともあり、女性学・ジェンダーに関する研究会があまり開かれなくなりました。過去の記録(九〇年代)を見ると、年間十回から二十回ほど講演会や研究会を開催していました。

その研究会も、教員だけでやるのではなく、「学生や院生も来てください」と広報して参加を呼び掛けています。来日している外国の方をお呼びして、通訳を付けた講演会を何度もやったり、映画の上映会を行うなど、学生を巻き込んださまざまな取り組みをしていました。

いまのシンポジウムは、研究成果の公開ということで、外部の一般の方を対象にする側面が強いのですが、当時は学生に研究成果を還元するところに重きを置いていたので、「学生に聴かせたい」と思う講師を呼んできて、本当に積極的にやっていました。研究紀要を年一回発刊すること、シンポジウムを年一回開催すること、『クロノス』(写真4)を発刊することは、女性歴史文化研究所開設当初からずっと続

写真4　女性歴史文化研究所広報誌「CHRONOS（クロノス）[時の鳥]」

市民・学生に、本学教員や研究所の研究成果を親しみやすく発信する広報誌として1994年10月に創刊。現在までに44号発刊している。



いています（クロノスは一九九四年〜）が、研究会は以前に比べるとなかなか開催できないというのが現状です。

【細川】

他の大学の研究所は、女性学に軸足を置く研究所のほうが多いですね。ですから、本学は女性史に基礎を置くのだというかたちでやってきた。これは一貫していると思うんです。一貫しているとは思うけれども、鎌田先生などがおられて、シンポジウムなどでは他の分野の方をお招きして、パネルディスカッションもやっていた。黎明期・発展期はそういう要素が強いのではないかと思います。荻野美穂先生（当時、奈良女子大学助教授）に来てもらったり、落合恵美子先生（当時、国際日本文化研究センター助教授）が会場発言をされたり、初期はそういう要素がわりあい強かったと思うんです。

文化政策研究センターができ、看護実践異文化国際研究センターもでき、本学の研究所・研究センターが必ずしも女歴研だけではなくなるなかで、そしてまた市民向けになったこともあって、歴史学の女性史の成果を市民向けに話すというかたちでのシンポジウムがより多くなっていったかなという気がします。ただ、ずっとそうだという意味ではなくて、ひろたまさき先生などはアジア圏を中心とする海外の方を呼ぼうとか、所長ごとの特徴の違いはありますが。

【増渕】

複数の学部・学科が急速にできあがったことと、それぞれの分野の独立性がかなり強い部分があり、しかもそれぞれが研究機関を持つ位置付けになったこともあって、全体を束ねていくというテーマそのものも見つけにくくなったし、また全体を束ねるための機関ではない個別の機関・研究所という位置付けになりましたから、昔みたいに同時進行的に、複数の視点で、違う分野までという研究がなかなかやれなくなったのは事実ですね。

【細川】

ただ、第一〇プロジェクトの「歴史における女性の身体と看護・医療」は、看護の先生が入ってくれて、文理融合の研究をするということで、科研費が取れました。

【増渕】
その段階での橋らしいまとめ方ができないか、というところから出発したんですね。

【細川】
そういうこともあることはあるのですが、ただ全体的には歴史学中心で、歴史学で科研費が取れた場合には、もう一本、日本文学でプロジェクトを立てるとかね。
そういうふうに変わっていった面はあるだろうな、という気はします。それで言えば、田端先生が話してくださった時期が、文学部単科の中で「全学的に」という時代でした。

【田端】
せっかく座談会をしたのだから今後の参考にならなければと思うので、第二回目以降は「現状と課題」みたいなかたちでやってもらったらいいのではないかと思います。これから、どういうところを伸ばしていくとか、どういうことを付け加えていくとか、そういうものを出してもらったら、研究所のあり方も含めて今後に残るのではないかと思います。

【細川】
『クロノス』に関して言えば、文学部以外の学科の先生の執筆の場所を設けたりはしていますね。

【増渕】
ちょっと強引にやりましたけど(笑)。

【細川】
それは所長が苦労して、やっているんだなと思いました。たとえば、「近代日本音楽史を彩る女性たち」とか、臨床心理学とか。そういう意味では、そういう中でも全学的にアンテナを張ろうという意図はわかります。

【北川】
研究所運営委員会は、所長任命の四名となっていて、現在は文学部の三学科と児童教育学科から運営委員を選出しています。全学付置の研究所だからといって、全学部に等しく何かを働きかけることになるかと言えば、やはりそうではないのですが、ただ、『クロノス』に関しては、一回生全員に読んでもらいたいと思っていて、頑張って配っています。

【増渕】
文学部が中心となって記事のうちの七割くらいは載るけれども、残りのうち二割くらいは、他学科の関わる記事を載せたい。たとえば心理学科だって女性のことには当然関わってくるわけですし、教育だって半分は女性を対象に教育していくわけですし、看護や理学療法だって、専門誌に載せるようなことではなくても、社会的に「女性のこう

いう部分は考えていかなければいけないのではないですか」みたいな問題提起はあるかもしれない。そういうものを入れてくれると、「橘の女歴研は『女性・歴史・文化』だけでなくて、広く目配りしているのだな」という見方をしてもらえるかなという気はしています。だから、無理やり書いてもらっているところがあります。

【松浦】

『クロノス』は、わりあい気軽に読めるということで評判がいいですね。学外でお会いした方とは、そのことがよく話題になったりします。研究者以外のところで知られているという感じかな。

【北川】

紀要は論文なので、専門の人でないと取っ付きにくいですが、『クロノス』は、そのときのリアルな話題も入れながら書いてくださっている方が多く、読みやすいですね。特に一回生には、「大学にはこんな研究所があるのだ」ということを知ってもらいたいという思いがあります。

【田端】

私も自分の書いたところだけ学生に配ったりしたけれども、そのときは見落としていても何かの機会に目を通したら、「こんなこともあるんや。おもしろいなあ」というふうに興味も変化してくるので、「もらったものは、ぜひ捨てないように永く持っていてね。あとで役立ちます」と言い含めて配布してもらったらいいと思います(笑)。

【細川】

松浦先生の連載は創刊からずっとでしょう(一九九四年十月発刊の創刊号から現在まで、クロノスに「イギリス女性生活誌」を連載中)。

【田端】

そうそう。これはぜひ本に。

【松浦】

本にしようと思ったときに、個人的な理由でやめてしまって、もうすぐこれも終わります。でも、読み返すと、いろんなことを書いていて、けっこう頑張って書いてきたんだなとしみじみ思いました。今年は発行が年一回なので、来年度に一冊か二冊出て、それで連載が終わりですね。

【田端】

いままでの図書は、研究所が刊行していますよね(写真5)。だから、松浦先生の連載も、研究所刊行の本にされたらいいと思います。

【松浦】

私は「女性史特講」をやっていますが、最初の「女性史学の誕生」で、脇田先生や田端先生の名前が出てきて、学生に「日本の女性史学

はここから始まっている」と話します。まさにパイオニアですから、もっとご自分のことを語っていただいてもよかったのに。

【細川】

私から振って、先生ご自身の研究者としての履歴を話していただいたのも、女歴研の所長というだけでなく、女性史の研究者としては、もう脇田先生に聞くわけにいかないから、田端先生が話してくれないと。

【増渕】

私は田端先生のことをてっきり中世の領主制の研究者だと思っていたら、橘に来たら女性のことばかりやっているから「うーん」と思いました。でも、その後、先生が半済の論文を書かれて、「いったいどっちをやっているんだろう」と思いましたが、結局、両方をやることにされたのですね。

写真５　女性歴史文化研究所出版物

写真６　女性歴史文化研究所（図書館２階）

【田端】

このときから、レールが二本になったんです。脇田先生の影響力が強かったです（笑）。

【増渕】

レールが二本になったというのは、先生から見たらよかったことなのですか。

【田端】

それがいま、単線になりつつあります。最後に日野富子の本を書こうと思ったら、昔の村落研究や領主制研究や幕府の裁許などが全部、自分の中では一つになってきて、日野富子の時代が非常に豊かになったからよかったなと、いまでは思っていますね。脇田先生に引っ張り込まれたのが、ちょうどよかったのかなと（笑）。

【細川】

脇田先生は組織人だったから、女歴研の初期には海外の方などを呼ぼうという話になりました。これも脇田先生が、女性史の研究者を組

織しようという面と、日本史の研究の成果をなんとかして英語文化圏の人たちに知らしめようという面があって、『ジェンダーの日本史』（上下巻）（脇田晴子、S・B・ハンレー編／東京大学出版会／一九九四年）は半分が外国の研究者で、半分が日本の研究者ですね。あれも脇田先生の組織力だと思います。

【田端】

そうなんです。組織するのがすごく上手な方で、『ジェンダーの日本史』も、私は日本語の論文だけ書いたら済むかと思ったら、他の人の英語の論文も読まなければいけないことになって、辞書を片手に何冊も読んで、間違っているところを直さないといけない。向こうも日本語を英語に訳してくださるから、お互いに見たり、見てもらったりしたので、あれは大変な作業でした。でも、これで英語力が上がったかというと「?」です。

【細川】

東京大学出版会から『ジェンダーの日本史』の日本語版が出て、大阪大学出版会から英語版を出して、両方出すのが脇田先生の「英語文化圏に日本の女性史・ジェンダー史研究の成果を紹介する」という当初からの企画でしたからね。

【田端】

本当にすごい人で、先を見通すことができて、しかも組織力がありました。

【増渕】

それでは、まだ話し足りないとは思いますが、いったんこの辺で終わりにしたいと思います。今回は「女性歴史文化研究所の黎明期～発展期にかけて」をテーマに話し合いました。次回は「女性歴史文化研究所の成熟期～未来に向けて」というテーマで、女性歴史文化研究所の果たした役割と意義は何かを考えるとともに、今後、社会はどのように変わり、女性歴史文化研究所はどのような活動に取り組むのか。女性歴史文化研究所の新たな展開などについて、意見交換したいと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

（了）

表１　女性歴史文化研究所所プロジェクト一覧

プロジェクト名		代　表	所　属	期　間
第１プロジェクト	歴史における家族と女性―日本と世界	細川　涼一	歴史学科教授	1993～1997年度
	出版物：『家と女性の社会史』（日本エディタースクール、1998年）			
第２プロジェクト	現代社会と女性(特別プロジェクト)	高橋　雅延 鎌田　明子	一般教養課程助教授 英語英文学科教授	1993～2004年度
	女性文化の再生産過程―母-娘関係の研究	河原　和枝	現代マネジメント学科教授	2004～2007年度
	出版物：『母と娘の歴史文化学―再生産される〈性〉』（白地社、2009年）			
第３プロジェクト	西欧女性史研究―フランスを中心に	志賀　亮一	現代マネジメント学科教授	1993～2007年度
	出版物：『女の歴史』Ⅰ～Ⅴ(翻訳)(藤原書店、1994年～2001年)			
第４プロジェクト	D・H・ロレンスの愛と性	杉山　泰	英語英文学科教授	1993～1994年度
第５プロジェクト	地域女性史研究　大阪府枚方市の場合*	田端　泰子	歴史学科教授	1994～1996年度
	出版物：『伝えたい想い―枚方の女性史』（枚方市発行、ドメス出版、1997年）			
第６プロジェクト	京都の歴史と女性	細川　涼一	歴史学科教授	1998～2002年度
	出版物：『京都の女性史』（思文閣出版、2002年）、『京都と鴨川の歴史』（思文閣出版、2001年）			
第７プロジェクト	文学に見る『悪女』観の形成	鈴木　紀子	日本語日本文学科教授	2001～2006年度
	出版物：『〈悪女〉の文化誌』（晃洋書房、2005年）、『女の怪異学』（晃洋書房、2007年）			
第８プロジェクト	女性生活文化交流史**	横田　冬彦	歴史学科教授	2004～2007年度
	出版物：『女たちのシルクロード(異文化交流と女性)』（平凡社、2010年）、 『異文化交流史の再検討：日本近代の〈経験〉とその周辺』（平凡社、2011年）			
第９プロジェクト	ホスピタリティと女性文化	松浦　京子	歴史学科教授	2004～2007年度
第10プロジェクト	歴史における女性の身体と看護・医療 ―生・老・病・死―**	細川　涼一	歴史学科教授	2008～2012年度
	出版物：『医療の社会史―生・老・病・死』（思文閣出版、2013年）			
第11プロジェクト	現代の表象文化に見るトランスジェンダー	野村幸一郎	日本語日本文学科教授	2009～2012年度
	出版物：『表象のトランス・ジェンダー―越境する性』（新典社、2013年）			
第12プロジェクト	装いと身体の歴史	南　直人	歴史学科教授	2013～2017年度
	出版物：『身体はだれのものか―比較史でみる装いとケア』（昭和堂、2018年）			
第13プロジェクト	社会における女性の活動―京都とその周辺を舞台にして	増渕　徹	歴史学科教授	2018～2022年度 （予定）

＊　枚方市よりの受託研究
＊＊　科学研究費補助金基盤研究(B)採択

表２　女性歴史文化研究所シンポジウム一覧

(1)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第１回	1992年12月３日	女性史の新時代をめざして ―女性史研究の現状と課題―	マーティン・コルカット（アメリカ・プリンストン大学教授）、パトリシア・ツルミ（カナダ・ヴィクトリア大学教授）、脇田晴子（大阪外国語大学教授） コーディネーター：田端泰子（本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長）、杉村和子（本学文学部教授）
第２回	1993年12月４日	おんな・女性・・歴史と現在・・	
		第一部「大学生の性別役割意識をめぐって」	調査報告：高橋雅延（本学文学部助教授） 井上章一（国際日本文化研究センター助教授）、田端泰子（本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長）
		第二部「絵解き―形象としての「女」たち」	細川涼一（本学文学部助教授）、鈴木紀子（本学文学部教授）、浅井雅志（本学文学部教授）
第３回	1994年12月３日	現代の家族と女性―近代家族制度の崩壊は、女性に何をもたらすか	高桑法子（同志社女子大学助教授）、浅岡美恵（弁護士）、野川照夫（本学文学部教授）、鎌田明子（本学文学部教授）
第４回	1995年12月２日	“性と生殖”（リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ）を考える ―北京世界女性会議からの問題提起	荻野美穂（奈良女子大学助教授）、柘植あづみ（北海道医療大学講師）、鎌田明子（本学文学部教授）
第５回	1996年12月７日	ライフスタイルの変化と女性 ―生き方の多様性を求めて―	上掛利博（京都府立大学女子短期大学部助教授）、津村明子（大阪府立女性総合センター館長）、鈴木紀子（本学文学部教授）
第６回	1997年11月15日	大人と子供 no 空間―ジェネレーションギャップと若者文化	東靖男（ひがし心理クリニック所長）、黒瀬久美子（JFPA ハートブレイク思春期相談員）、碓井敏正（本学文学部教授）
第７回	1998年12月５日	ジェンダー研究の現在～21世紀へ向けて 作られてきた女性たち、創っていく女性たち	舘かおる（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授）、米田佐代子（山梨県立女子短期大学教授）、田端泰子（本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長）
第８回	1999年12月４日	日本文化におけるジェンダー ―図像（イメージ）と言説（ディスクール）―・・・視る、視られる、おんな、おとこ・・・	池田忍（千葉大学助教授）、鈴木紀子（本学文学部教授）、細川涼一（本学文学部教授）
第９回	2000年12月２日	おんなの身体と装飾―近代中国と日本　私の身体は誰のもの？	羅蘇文（上海社会科学院歴史研究所研究員・女性歴史文化研究所研究員）、沢山美果子（順正短期大学教授）
第10回	2001年12月１日	昭和の女性 ―得たもの　失ったもの―	澤地久枝（ノンフィクション作家・評論家）、松尾尊兊（本学文学部教授）
第11回	2002年12月７日	戦国社会と女性の役割	永井路子（作家）、田端泰子（本学文学部教授）
第12回	2003年12月６日	異文化経験と女性 ―大英帝国のレディたち、『日本帝国』の主婦たち―	井野瀬久美恵（甲南大学教授）、ひろたまさき（本学文学部教授）

(2)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第13回	2004年12月４日	アジアにおける良妻賢母主義 ―その歴史と現在	洪良姫(韓国・漢陽大学校人文科学大学講師)、程郁(中国・上海師範大学人文学院助教授)、ひろたまさき(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長) コメンテーター：姫岡とし子(立命館大学国際関係学部教授)
第14回	2005年７月２日	ミシンと女性と経済	アンドリュー・ゴードン(アメリカ・ハーバード大学教授、ハーバード大学ライシャワー日本研究所前所長)、中谷文美(岡山大学文化科学研究科助教授)、松浦京子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第15回	2006年12月９日	織豊政権期の男女像とその規範化 ―山内一豊・千代を中心に	小和田哲男(静岡大学教育学部教授)、長野ひろ子(中央大学経済学部教授)、田端泰子(本学学長・文学部教授) コメンテーター：細川涼一(本学文学部教授)
第16回	2007年７月21日	男女共同参画社会をめざして ―その歩みと課題―	長濱英子(京都府府民労働部女性政策課長)、吉田秀子(特定非営利活動法人 働きたいおんなたちのネットワーク理事長)、松浦京子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第17回	2008年７月12日	語り物文芸と女性 ―日本中世～近世にかけて―	阪口弘之（神戸女子大学文学部教授・古典芸能研究センター長)、砂川博(相愛大学人文学部教授)、細川涼一(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第18回	2009年７月４日	歴史のなかの子どもの行方	沢山美果子(岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員) 増渕徹(本学文学部教授)
第19回	2010年７月10日	幕末・明治の京都と女性	辻ミチ子(元・宇治市歴史資料館館長『女たちの幕末京都』『和宮』著者)、高久嶺之介(本学文学部教授)
第20回	2011年６月25日	日本中世における女性の生活と表象	保立道久(東京大学史料編纂所教授)、田端泰子(本学名誉教授) コメンテーター：細川涼一(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第21回	2012年７月28日	近代女性の社会史―日本とドイツ	横田冬彦(京都大学大学院文学研究科教授)、南直人(本学文学部教授)
第22回	2013年６月15日	江戸時代の病気と女性	鈴木則子(奈良女子大学研究院生活環境科学系教授)、有坂道子(本学文学部准教授)
第23回	2014年６月21日	近代社会の病気と女性	松浦京子(本学文学部教授)、高久嶺之介(本学文学部教授)
第24回	2015年７月11日	近代と働く女性たち	佐伯順子(同志社大学大学院社会学研究科教授)、松浦京子(本学文学部教授)
第25回	2016年７月９日	近代ヨーロッパ社会における身体表現と身体ケア ―食とファッションを中心に―	北山晴一(立教大学名誉教授)、南直人(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)

(3)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第26回	2017年６月24日	食と歴史のジェンダー ―日本とアジア―	原田信男（国士舘大学21世紀アジア学部教授）、阿良田麻里子（立命館大学客員教授）、南直人（本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長）
第27回	2018年７月７日	発信する皇女たち―斎王を中心に	榎村寛之（三重県斎宮歴史博物館学芸普及課長）、野田泰三（本学文学部教授）、増渕徹（本学文学部教授）
第28回	2019年７月６日	近代ヨーロッパにおける女性の社会進出 ―イギリスとフランスの事例から	松田祐子（大学非常勤講師）、松浦京子（本学文学部教授）、渡邊和行（本学文学部教授）

※2020年度は新型コロナ感染症拡大防止のため、開催中止。